

# OKADA-ROOM Vol.4

岡田三郎助とゆかりの画家たち—後期

会期 2016年3月4日(金)~5月15日(日)

「OKADA-ROOM」では、平成27年冬から28年春にかけて、岡田三郎助と岡田にゆかりのある画家たちの作品を、前期（Vol. 3、平成27年12月~28年2月）・後期（Vol. 4、平成28年3月~5月）に分けて紹介しています。

岡田三郎助は、文部省美術展覧会（文展）等の審査員を歴任し、帝国美術院会員となるなど画壇の大家として活躍するかたわら、東京美術学校（現在の東京藝術大学）や女子美術学校（現在の女子美術大学）などで教鞭を執り、多くの後進を育てました。

今回の後期展示では、中沢弘光や青木繁といった個性豊かな画家たちや、岡田との出会いを経て本格的に洋画家への道を歩んだ高木背水、岡田とともに佐賀美術協会を結成し、故郷佐賀の美術の発展に貢献した御厨純一や北島浅一ら後輩の洋画家たち、そして岡田から学び、のち日本洋画壇における女性画家の先駆者として活躍をした、有馬さとえ（三斗枝）と甲斐仁代の作品を、館蔵の岡田の名品と併せて紹介します。

## 出品目録

1	婦人像	Portrait of a Woman	岡田三郎助	1909（明治42）	60.5×48.7	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-----	---------------------	-------	------------	-----------	----------	----

### 静謐な魅力を湛えた横顔の女性

岡田41歳の頃の作品。女性の着物と背景の壁はシンプルな濃褐色でまとめられ、暗がりから肌の白さを浮かび上がらせるような効果を与えている。女性の表情も丁寧に描きこまれ、当時の筆の充実ぶりをうかがうことができる。岡田はこの時期、本作や《薊》<sup>あざみ</sup>（当館蔵）など、物思いにふけるようなメランコリックな表情の女性像をたびたび描いた。

2	花野	Field of flowers	岡田三郎助	1917（大正6）	65.2×90.8	油彩・カンヴァス	館蔵
---	----	------------------	-------	-----------	-----------	----------	----

### 師ラファエル・コランへのオマージュ

岡田は生前から、ラファエル・コランに師事した日本人画家の中でもその作風を最もよく受け継いだ画家と評されていた。本作はコラン没後の翌年に描かれたもので、草上に横たわる裸婦を描いたコランの作品《花月（フロレアル）》（パリ・アラス美術館蔵）などが連想される。本作は画家にとって師コランへ捧げるオマージュであったのかもしれない。第11回文部省美術展覧会に出品。

3	藤山雷太像	Portrait of Raita Fujiyama	岡田三郎助	1914（大正3）	92.6×72.0	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-------	----------------------------	-------	-----------	-----------	----------	----

### 画家と実業家、佐賀出身の両雄の出会い

伊万里出身の実業家、藤山雷太の肖像である。この絵が描かれたとき藤山は51歳、岡田は45歳。互いに、それぞれの道でキャリアを極めつつある時期であった。画面全体は柔らかく温かい色調でまとめられているが、一方で固く握られたこぶしや上向きの目線に、肖像主の高潔な人格も感じさせる作品である。

## 藤山雷太（ふじやま・らいた、1863-1938）

伊万里市に生まれる。慶應義塾に進学、佐賀の県議会議員となるも、福沢諭吉の紹介で実業界に転じ、三井銀行に就職し三井財閥の改革にあたる。王子製紙会社などを経て、1909（明治42）年に渋沢栄一の推薦で大日本製糖会社社長に就任。破綻後の同社の再建に貢献する。貴族院議員などもつとめ、財界の雄として多彩に活躍した。

4 涼々園にて At Soso-en 岡田三郎助 1935（昭和10） 40.9×53.0 油彩・カンヴァス 館蔵

### 涼しげな女性の姿

滞在していた熱海の旅館で描かれた作品。清涼な水辺の空気と和服の女性という組み合わせは、岡田の先輩格であり親しく交遊した黒田清輝くろだ せいきの代表作《湖畔》（東京文化財研究所蔵）を思い起こさせる。モデルは当時、岡田のモデルを数多く務めた北村久子。一心に読書にふける姿は、柔和ながら凜とした雰囲気漂わせる。

5 裸婦 Nude 岡田三郎助 1935（昭和10） 99.8×65.5 油彩・カンヴァス 館蔵 佐賀県重要文化財

### 円熟期を迎えた岡田晩年の傑作

岡田67歳、1935（昭和10）年の第二部会展に出品された作品。当時の新聞では「今までの帝展よりもつと力瘤ちからこぶを入れた作品」（報知新聞）などと評され、早くより名作の呼び声が高かったとみられる。展覧会後は朝鮮の李王家が所蔵し、旧李王家美術館（現在の徳寿宮美術館、ソウル市）に飾られたが、1940（昭和15）年の岡田の遺作展に出品されたのちは、一般に公開されることがなかった。

6 静物 Still Life 甲斐仁代 1962（昭和37） 65.0×80.0 油彩・カンヴァス 館蔵

### 躍り出すような色彩が魅力

原色をふんだんに使った色彩とリズムある筆致が特徴的な作品。赤の使い方はアンリ・マティスの作品を連想させ、壁の模様に見えるポップな表現は現代においてもなお新鮮に映る。美術評論家の桑原住雄くわはら すみおは、甲斐の画風を「鮮やかに、すきとおるように冴える色の共鳴と、即興的に素早くのびる暢達の感触」と評した。

## 甲斐仁代（かい・ひとよ、1902-1963）

佐賀市に生まれる。中国・青島の女学校を卒業し、女子美術学校（現在の女子美術大学）で岡田三郎助から洋画を学ぶ。1923（大正12）年に二科展に初入選。満州や奈良、軽井沢などを旅して作品を描き、二科展や一水会展で活躍。「婦人洋画協会」の創立に加わるなど、女性画家の地位向上にも貢献した。晩年は荒々しいタッチと大胆な色遣いを得意とした。

7 朝 Morning 有馬さとえ 1957（昭和32） 90.5×72.5 油彩・カンヴァス 館蔵

### 未来を見据える女性の姿

この頃、有馬は長く療養を余儀なくされていたせいか、背景は重い色で統一され、荒々しい筆致のアサガオからは不穏さが漂う。しかし、遠くを見据える女性の表情には気高さも感じる。有馬は本作のような芯の強さを感じさせる女性像を多く描いたが、女であるがゆえの苦勞のなか画家としての道を切り拓こうとする、自身の信念を重ね合わせていたのかもしれない。

### 有馬さとえ（ありま・さとえ、1893-1978）

鹿児島市に生まれる。本名サト。子どもの頃から西洋画に憧れ、三宅克己<sup>みやけ こつき</sup>の水彩画の絵ハガキを集めたという。18歳頃に上京して岡田三郎助の弟子となり、のち岡田の本郷洋画研究所で学ぶ。1926（大正15）年、第7回帝展に《花壺》を出品、女性画家では初めての特選を受賞。日高文子や牧野虎雄の影響も受け、ダイナミックな筆致で女性像や静物を描いた。

8	舞妓	Portrait of Maiko	中沢弘光	1954-59 (昭和29-34)頃	44.8×37.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	----	-------------------	------	-----------------------	-----------	----------	----

#### 飾らない少女の表情をとらえた一作

中沢の舞妓への関心は、1903（明治36）年頃に岡田と共に出かけた京都旅行に端を発している。これ以降、中沢は生涯にわたり重要なテーマとして舞妓を描き続けた。

本作は80歳頃の作。室内の落ち着いたある雰囲気の中、若い舞妓の鼓の紐を整える何気ないしぐさやリラックスした表情が微笑ましい作品である。

### 中沢弘光（なかざわ・ひろみつ、1874-1964）

東京に生まれる。1887（明治20）年、曾山幸彦<sup>そやま さちひこ</sup>の画塾で洋画を学び始め、岡田三郎助と出会う。その後も共に黒田清輝らの天真道場に入入りし、また白馬会創立にも参加するなど、両者の親交は長く続いた。1907（明治40）年、東京勸業博覧会で一等賞牌を受賞。とりわけ京都の舞妓を好んで画題とし「舞妓の画家」とも称された。本の装丁なども手掛けており、デザイナーとしての顔も持つ。

9	織月帰舟 <sup>せんげつきしゅう</sup>	Boat Returning under the Crescent Moon	青木繁	1910（明治43）	49.5×60.5	油彩・カンヴァス	個人蔵
---	--------------------------	--	-----	------------	-----------	----------	-----

#### 唐津への旅が生んだ、幻の海景

青木は海を好んでテーマとした。本作は唐津市相賀<sup>おうか</sup>から東方の海を望む海景を描いたものと考えられるが、この方角には現実には全く同じ景色は存在しない。おそらく岩場の位置を画面上で再構成し、理想の風景を作り出したのだろう。裸身の漁夫たちは原始的な力強さに満ちて、あたかも神話の一場面かのようにである。

### 青木繁（あおき・しげる、1882-1911）

久留米市に生まれる。洋画家の森三美<sup>もり みよし</sup>に学び東京美術学校に入学。1904（明治37）年、千葉の海岸で代表作《海の幸》（石橋美術館蔵）を描く。1907（明治40）年、東京勸業博覧会に《わたつみのいろこの宮》（石橋美術館蔵）を出品するも、三等賞という不本意な結果に終わり失意のなか帰郷。九州北部を放浪し、28歳の若さで没した。古事記を愛読し、神話に想を得た浪漫的な作品を多く描いた。

10	朝日（絶筆）	The Morning Sun (Aoki's Last Work)	青木繁	1910（明治43）	73.0×115.0	油彩・カンヴァス	小城高等学校同窓会 黄城会蔵
----	--------	------------------------------------	-----	------------	------------	----------	-------------------

#### 理想の芸術を追究した青木の絶筆

唐津の海に昇る朝日を描いた、青木の絶筆とされる作品。療養のために訪れた唐津では病身を押して制作に励み、本作のほか《織月帰舟》など数点を残している。金が底をつき、身一つで知人の住む小城へと戻ったときも、本作（本作の下絵という説も）は大事に手放さなかったという。2年余りを佐賀で過ごした青木はこの翌年、博多の病院で息を引き取った。

**室内で過ごすくつろぎのひと時**

フランス留学から帰国した大正末頃に描かれた作品。素早いタッチを用いながらソファや女性の周囲などに塗り残しをつくり、明るいグレーの地色を利用して逆光の様子をとらえている。窓の外の明るい色調と室内の落ち着いた色調の重なりが画面に奥行きを生み、室内のくつろいだ雰囲気をよく表している。

**北島浅一（きたじま・あさいち、1887-1948）**

小城市に生まれる。本名の「朝一」は、朝一番に生まれたことに由来する。白馬会第二研究所を経て東京美術学校へ入学。同校では御厨純一や萬鉄五郎が同期であった。大正8(1919)年から3年間フランスに留学、アカデミー・コラロッシに学ぶ。1921(大正10)年、《踊り場》がサロン・ドートンヌに入選。帰国後は帝展・文展を中心に活躍する。

**外光表現の習得の成果が表れた佳作**

東京美術学校を卒業後、同校研究科に在籍中に描かれた作品。外光のなかの人物というテーマは、当時同校で教えていた黒田清輝や岡田三郎助が特に得意としていたもので、御厨もこれをよく学んでいる。モデルは農家の娘であろうか。健康的に日焼けした手足の描写から、少女の生命力が伝わってくる。

**御厨純一（みくりや・じゅんいち、1887-1948）**

佐賀市高木町に生まれる。1897(明治30)年上京、白馬会第二研究所を経て東京美術学校で学ぶ。同校の卒業生と「四十年会」などの洋画の親睦団体を立ち上げる。1926(大正15)年、フランスに留学、ヨーロッパを周遊して現地の風景などを描いた。戦時中は海軍従軍画家として多くの戦争画を残した。力強い線と量感豊かな描写に特色がある。

**四季折々の自然のなかで句作を楽しむ**

山口邸には梅・桜・柿などが茂る豊かな日本庭園があり、夫妻はここで俳句を楽しんだ。本作はその庭で句作をするスガ夫人をとらえたもの。山口は特に彼女の手の形にこだわり、何度も下描きを重ねたという。人物の後方に大きく余白を取り、考え込む夫人の思いまでも描き出すかのようである。同年の第7回帝展出品作。

**山口亮一（やまぐち・りょういち、1880-1967）**

佐賀市に生まれる。東京美術学校を首席で卒業したのち、1911(明治44)年に佐賀へ帰郷。岡田三郎助の信任を受け、佐賀美術協会創立の際には会長に就任した。1921(大正10)年から退職まで佐賀師範学校で洋画を教え、また佐賀洋画研究所などの画塾も主宰。生涯を通じて佐賀の芸術文化の発展と後進の育成に務めた。句作や陶器の絵付け、写真なども嗜む多才な人物でもあった。

**異国の光の中で花開いた色彩**

フランス滞在中に描かれた作品。手前の道の曲線が画面に安定感をもたらし、さらに明るい中間色の諧調と丸みのあるタッチが、眼下の街を包む柔らかな光を的確に表現している。

パリに住んだ武藤はルーヴル美術館へ通い詰め、ミレーやルドン、セザンヌら巨匠たちの作品を模写しながら学んだという。

**武藤辰平（むとう・たつへい、1894-1965）**

佐賀市材木町に生まれる。1915(大正4)年、東京美術学校西洋画科に入学、岡田三郎助に学ぶ。在学中は福岡出身の中村研一なかむら けんいちとともに岡田にかわいがられたという。卒業後に帰郷、佐賀美術協会展などで活躍する。また、山口亮一の洋画研究所で教鞭を執ることもあった。1931(昭和6)年からフランスに約4年留学。明るく伸びやかな色彩で草花や風景などを描いた。

**すがすがしい朝の風景**

高木はしばしば国内旅行に出かけ、各地の風景をスケッチしていた。故郷である佐賀も数度訪れており、1941(昭和16)年の秋には佐賀市で個展を開催し、本作を出品している。明るい東の空と右奥の未明の空とのコントラスト、苔むした屋根に落ちる淡い光の表現などに、高木の優れた色彩感覚が見て取れる作品である。

**高木背水（たかぎ・はいすい、1877-1943）**

佐賀市松原に生まれる。本名誠一郎。11歳で上京。1893(明治26)年頃から岡田三郎助を知り、画塾大幸館に入り本格的に洋画家を志す。苦学を重ねながらアメリカ・イギリスでも学んだ。また、日本統治時代の朝鮮にも暮らし、現地の美術教育の振興に尽力した。デッサンの名手であり、《明治天皇像》、《鍋島直大侯像》(ともに佐嘉神社蔵)など優れた肖像画も残っている。

岡田の東京美術学校の生徒である中野和高なかの かずたか(1896~1965、愛媛県出身の洋画家。帝展・文展や創元会を中心に活躍)について述べた原稿。「性格上の面白い話など澤山知ってる」けれど言うのはよそう、と勿体をつけるところなど、弟子への温かいまなざしと岡田の茶目っ気を感じる。岡田は筆不精で、手紙や原稿は妻の八千代に代筆を頼むこともあり、本稿も八千代の筆によるものと思われる。1927(昭和2)年発行の『美之國』4巻に掲載。